

序

呼吸器・アレルギー領域の外来治療で最も困るのは、喘息やCOPDの診断だと思われます。次にガイドラインに準じた治療を行ってもうまくいかないときの次の一手をどうするか。本書はこの2点に絞って、日常診療に役立つ実践の書として企画されました。

私自身は28年間札幌医科大学で呼吸器・アレルギー領域の研究・診療・教育に携わった後に、大学の目の前で専門内科を開業しましたが、このとき大学病院と市中クリニックとで大きなギャップがあることを知りました。大学診療では解決済みと思われた気管支喘息、COPD（従来の肺気腫と慢性気管支炎）、ACOS（気管支喘息とCOPDのオーバーラップ症候群）の初期像が典型的でないことも多く、1つの症状に多くの疾患が関与していたり、隠蔽されているため診断に迷うことが多いことに気づかされたのです。また、重症例・難治例が予想より多く、50m先の私の大学外来にこれまでなぜ来院しなかったのかの理由にも驚かされました。それは単に「大学病院で診療しているのを知らなかった」というものでした。

外来で診る喘息やCOPDは、高血圧、動脈硬化、糖尿病などのように数値で診断できる疾患とは異なり、問診・病歴聴取・聴診が重要です。胸部X線も除外診断には有用ですが、喘息・COPD・ACOSの重症度、治療方針を立てるうえでは非力です。本書ではこのような状況を理解されている専門医で名医の先生がたの助けをお借りして、第一線で診療されている幅広い層の医療関係者に、根拠のある明日から使える診断方法と、吸入薬の使い分けや患者指導を解説していただきました。さらに、第一線での診療を経験しているからわかること、これまでの教科書では書きづらかったことまで、図表を豊富に使ってわかりやすく解説することを心がけました。本書の内容が喘息・COPD・ACOSの適切な診断・治療に少しでもお役に立てればと願っております。

最後になりましたが、本書の企画から出版に至るまで御尽力いただきました羊土社の鈴木美奈子氏・山村康高氏に深謝いたします。

2016年2月

NPO法人 札幌せき・ぜんそくアレルギーセンター 理事長
医療法人潮陵会 医大前南4条内科 院長
田中裕士